

説 教 『深い闇と降誕の光』山本 護 牧師
聖 書 民数記 24:16~17/マタイによる福音書 2:1~12

「神の仰せを聴き、いと高き神の知識を持ち、全能者のお与えになる幻を見る者(民数 24:16) バラムはモアブ人の幻視者で異教徒なため、後代には悪役とされるが、その「澄んだ目(24:15)」で見た幻を語った。「ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり、モアブのこめかみを打ち砕き、シエラのすべての子らの頭の頂を砕く(24:17)」。「笏」とは王の徴であり、群雄割拠する世が平定されること。どの民族が勝利者だっていい。殺し合いをせず、平和でありさえすれば。

降誕が起こった時代も民族を超えて、救い主が求められていた。東方の学者らは延々旅をして来て、ヘロデの王宮を訪れ、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられるか(マタイ 2:2)」と尋ねた。イスラエル諸部族の差異どころではない。遙かペルシャあたりの異教徒が「ベツレヘムで生まれたイエス(2:1)」を探しているのだ。彼らにとっても救い主のイメージは、「笏」を持つ「ユダヤの王」。だから真っ先に王宮を訪ねた。そしてそのことが結局、膨大な数の嬰兒虐殺を引き起こす(2:16)。

学者らは星に導かれて幼子イエスのいる場に辿り着き、喜びに溢れる(2:9~10)。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた(2:11)」。福音書に記述はないが、マリアも、東方の学者らも、さぞや驚いただろう。マリアにしてみれば、夜半、見るからに異形の学者がぞろぞろ現れたことが。学者らにしてみれば、「救い主がこんなにみすぼらしいはずはない」と訝しんだ。「笏」とはまるでかけ離れた粗末な救い主。しかし学者らは先入観を悔い改めて、自分の一番大事なものを献じる(2:11)。貧しい純朴少女のマリアは、「黄金、乳香、没薬(2:11)」の価値や意味など分らないまま受け取った。

救い主の降誕のために献じられた「黄金、乳香、没薬」とは何か。はたして、多くの男児の血と嘆きではないか(2:16)、と私は思いを巡らせる。学者にとって乳香や没薬は、吉凶を占う大切な商売道具であろう。だが彼らの献身は、新しい可能性を望まない権力(ヘロデ王 2:3)と権威(祭司長・律法学者)によって邪悪に転換され、多くの幼い命が奪われることになる。クリスマスのイメージが浮かぶ。幼子イエスには嬰兒たちの命の重みがのしかかり、深い闇の内に消え入りそうな光が灯っている。

私たちは「笏」と無縁であるゆえ、ヘロデ王ほどの悪は為さないだろう。だが祭司長や律法学者という信仰の担い手としてならどうだろうか。彼らは「新たなイスラエルの牧者が現れる」ことを認めていながら(2:6)、虐殺に加担した。現代パレスチナでの蹂躪、シリアやイラクでの空爆を容認し、「国益を守る」と意気込んで自衛隊派兵しようという日本政府を擁する私たちは、どうなのか。クリスマスの小さな光と大きな暗闇については、私たちが当事者。信仰の事柄として問われている倫理なのだ。

学者らは「東方でその方の星を見た(2:2)」。太陽や月がそうであるように、星もまた東方から昇る。星はすでに昇り始めている。星は「ついに幼子のいる場所の上に止まった(2:9)」。闇がどんなに深かろうと、小さな降誕の光を呑み込むことはできない。私たちはこの降誕の灯を胸に抱き手渡していく。



【おまけのひとこと】

闇の密度で灯のゆらめきを押さえることはできない 闇が濃度を増すほどに灯の照度は高まる
世の悪をおそれるな 自らの罪にむかうことをおそれるな 消えることのないこの小さな灯こそを